

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 土谷堂哉

西澤國護(新人) 長谷見びん 山崎亜也

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 後藤とみ子 小早健介 朱牟田恵洲 豊田ゆたか

中川雅夫 古田昇 星田啓子 宮内規雄 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ○は孤舟選者の選

九点 ウクライナの戦鬪は泥沼化

春泥や停戦の足はかどらず そらお (紀・忠・千・敏・ゆ・國・隆・け・三)

◎春鴨へ餌を投げゐる車椅子 堂哉 (紀・孤・そ・ゆ・雅・昇・け・三・盛)

八点 ◎戦なき世を語りつつ雛納め とみ子 (孤・五・〇千・敏・啓・び・規・盛)

惜しみなく銘酒を墓に彼岸かな 堂哉 (紀・忠・〇國・び・允・け・天・盛)

◎辛夷の芽子供はいつかは家を出る 正明 (忠・孤・健・孝・龍・隆・〇亜・三)

七点 残る鴨静かに己が身を流す 孤舟 (紀・そ・五・健・〇堂・允・昇)

六点 若桜成年皇女の頼もしき 健介 (紀・忠・〇と・ゆ・國・隆)

今年また客なき炬燵塞ぎけり 堂哉 (健・雅・び・啓・規・三)

啓蟄や結構危険な好奇心 正明 (紀・〇忠・五・び・隆・〇龍)

五点 火の舌を伸ばして巻いて野焼きかな 孤舟 (健・恵・堂・允・昇)

海鳴りや棚田を上るつくしんぼ びん (紀・そ・敏・啓・け)

◎園児らの天使の笑顔土筆摘む 昇 (紀・孤・た・孝・ゆ)

無人駅あくび大きく山笑ふ けい子 (そ・紀・敏・堂・規)

四点 春の温泉(ゆ)や東海林太郎を口遊む 紀久男 (恵・龍・允・盛)

筋トレを始めて早足春の風 忠彦 (そ・紀・隆・亜)

◎花咲くも訪ない来るは小鳥のみ とみ子 (紀・〇孝・恵・啓)

妻の庭馬酔木と小鳥友となり 雅夫 (紀・た・龍・國)

猫のゐる木瓜の花垣接骨院 びん (紀・昇・亜・天)

あまご食ふ箸の先から春の立つ 啓子 (紀・と・允・〇三)

桜餅老舗菓子屋にのぼり立つ 天牛 (紀・堂・隆・び)

三点 我家の前の木蓮が一斉に開花、地味な花だが春の楽しみ

木蓮の花列をなす通学路 そらお (紀・た・雅)

◎春めくや琴平歌舞伎の古き小屋 紀久男 (孤・た・恵)

「盛綱陣屋」

梅匂ふ芸の深みや菊之助 紀久男 (健・敏・天)  
 孫コロナ遂に我が家に春嵐 忠彦 (紀・た・敏)  
 蜃気楼天空の城現れて消ゆ 孤舟 (紀・五・千)  
 さへづりの輪唱となる禁漁区 全 (五・昇・規)  
 雀隠しまだ手付かずの未来あり 全 (紀・と・啓)  
 不屈なるコサツクの裔春嵐 五郎太 (紀・ゆ・天)  
 ◎みちのくの仕込みを終えて杜氏帰る ただしげ (紀・孤・國)  
 漁に出る船一艘に冴返る 全 (紀・千・恵)  
 止められぬ狂人ひとり春の泥 千恵 (紀・と・龍)  
 独活の香やお江戸育ちの地下育ち 全 (紀・と・○盛)  
 朝摘みの露の芽届き灘二合 堂哉 (千・敏・ゆ)  
 今もなほ愛車をしのび春惜しむ 盛雄 (紀・そ・亜)  
 花開き身の丈越えたミモザかな 國護 (紀・千・亜)  
 誰何されず国境越えて雁帰る 昇 (紀・○健・盛)  
 傘かしげ幼見上ぐる花の雨 規雄 (敏・孝・堂)  
 籠り居の赤き椿の散る夕べ びん (紀・た・雅)  
 ◎雲雀鳴く幸せな日を思ひけり けい子 (紀・孤・規)  
 肩上げを十三詣で見納めぬ 亜也 (紀・啓・天)  
 花便り人出も嬉し上野かな 全 (紀・五・規)  
 ◎いつしかに昭和は遠く目刺焼く 盛雄 (紀・孤・び)

二点

無事と聞きほつと朝餉を春の地震 健介 (紀・け)  
 華やげる初日の幕間桃の花 五郎太 (○紀・允)  
 浦のつく駅名探す春霞 全 (紀・亜)  
 朱剥がし修二会の僧の根来盆 全 (紀・啓)  
 ウクライナ国歌美し春寒し 恵洲 (○昇・け)  
 鶯や籠り居なれど日々新た ゆたか (紀・雅)  
 雪融けの山に向いて初ゴルフ 國護 (紀・た)  
 バギーよりこぼるる園児花の中 びん (紀・堂)  
 陽を受けて命のさかり花芽伸ぶ 啓子 (紀・孝)  
 年一度五人囃子の並べ方 亜也 (○恵・と)  
 春情やも一つの意味忘れかけ 全 (紀・三)  
 ◎わらび餅きな粉の海でおぼれそう けい子 (紀・孤)  
 春の朝新聞受けでハックション 天牛 (紀・忠)

一点

ほろ苦き菜の花お浸し酒静か 忠彦 (紀)  
 入彼岸供花持つ人席を詰め 五郎太 (紀)  
 緑青ドーム世紀を越へて春陽享く 千恵 (紀)  
 体操に美求めし人春に去る 全 (紀)  
 ポン・ペイ展観て 全 (紀)  
 富誇るモザイク床や春の展 全 (紀)

竹棹で若布刈った日懐かしや 　　ただしげ  
 澄みきつた夜空に月や余寒かな 　　全  
 煙立つ田んぼの中の野焼きかな 　　全  
 本店は京の菓子舗に古雛かな 　　(天)  
 雛祭鮎飯扇ぐ兄妹 　　(紀)  
 香る里草萌えに走る子等賑し 　　堂哉  
 新緑に息をはずます老夫婦 　　雅夫  
 香草の鼻腔に強く木の芽時 　　國護  
 足るを知らぬ大統領や春の雷 　　啓子  
 傘かしげ幼(おさな)の仰ぐ桜かな 　　びん  
 木の根元一人静かの慎ましく 　　規雄  
 上野なる帝冠様式さくら花 　　全  
 眠られぬ戦禍の街へ花褥 　　盛雄  
 (紀) (紀) (孝) (紀) (紀) (紀) (紀) (紀) (紀) (紀)

※ ※ ※ ※ ※

【句評】

九点句

ウクライナの戦鬪は泥沼化  
 春泥や停戦の足はかどらず

そらお

敏郎さん・・・泥沼の戦、一体何時まで続くのか。

ゆたかさん・・・早期の終結を願うばかりです。春泥がきいています

隆さん・・・「春泥」と戦の取り合わせ。「春泥や戦車の轍幾重にも」でも。

春鳴へ餌を投げゐる車椅子

堂哉

孤舟さん・・・春の鴨は傷ついたり病気になったりして北へ帰れなかった鴨たち。

ハンデイを負った車椅子の人とは心が通い合うのだろう。

ゆたかさん・・・ご老人でしょうか　のどかな情景が目には浮かびます。

盛雄さん・・・俳句仲間の女性が最近車椅子生活を余儀なくされてリハビリ中。併

し好奇心は旺盛。近くの大池に出向き鴨と遊んでいる。

八点句

戦なき世を語りつつ雛納め

とみ子

孤舟さん・・・雛は過去の長い歴史を観てきた。今年はウクライナ情勢を胸に秘め

て仕舞われたのだ。

五郎太さん・・・ウクライナの句がいくつつかある中で、春泥の中の激しい戦鬪や数百

万人の女子供の海外避難などを直接取り上げず、春の日本の中で静

かに詠んだこの句をいただきました。

千恵さん・・・ウクライナの悲惨な状況をやんわりと詠みつつ、片や我が国の平安

の今を「雛納め」という季語で表現されてその対比がとても身に

沁みました。

盛雄さん・・・戦なき七十六年、下五の雛納めがこの句を引き締めた。

惜しみなく銘酒を墓に彼岸かな 　　堂哉

忠彦さん・・・墓の主は余程酒好きな方だったようですね。

孤舟さん・・・飲兵衛だが素晴らしい父だった。好物の銘酒をお墓に。

天牛さん・・・よつぼどいい酒しか飲まなかつた故人でしようね。  
盛雄さん・・・酒好きだった父祖への何よりのご挨拶でしょう。

紀久男・・・小川恭延さんの墓参の折、長谷見敏さんとはこの折が初対面で円覚寺を案内して頂いた。この時は缶ビールで献杯。陽射しが強く、暑かった記憶があります。この句では清酒一升瓶と思われず。飲兵衛にはそれで充分と思われず。それにしても好い句ですね。

辛夷の芽子供はいつかは家を出る 正明

孤舟さん・・・いつまでも子供だと思っているが、やがては親離れをする時が来る。  
隆さん・・・「芽」は「花」を連想させ、生命の流転を示す。

## 七点句

残る鴨静かに己が身を流す

孤舟

五郎太さん・・・「己が身を流す」の措辞に感心しました。  
健介さん・・・小生もこちらの句会で同趣の句を詠みました（あまり評価されず）

## 六点句

若桜成年皇女の頼もしき

健介

忠彦さん・・・会見を見て、将来天皇になる予感がします。  
とみ子さん・・・季語と相まってお句が格調高く素晴らしいです。  
ゆたかさん・・・ご立派に成長され 好感のもてるお方です。  
隆さん・・・愛子様の記者会見と悠仁殿下の卒業が重なった。宮内庁長官は日程ミスと公表したが、愛子様への期待は大きい。

啓蟄や結構危険な好奇心

正明

忠彦さん・・・このような面白い句を作れて敬服します。  
龍平さん・・・「欲望と言う電車」も人流増。さてどんな好奇心。〰年ほど飲少数くして哀愁深しだったが 飲極まりて哀愁深しになりませんよう。  
でも春が来た訳です。多少は羽目を。  
隆さん・・・プーチン大統領のウクライナ侵攻でしょうか。「啓蟄にロシアの開戦驚きぬ」でも。

## 五点句

火の舌を伸ばして巻いて野焼きかな

孤舟

恵洲さん・・・野焼きの炎がまるで生き物のように動き変化する様をうまく表現されてるように思います。

海鳴りや棚田を上るつくしんぼ

びん

敏郎さん・・・棚田を昇るつくしんぼと海鳴りの妙！

園児らの天使の笑顔土筆摘む

昇

孤舟さん・・・幼い子供はいつもエンジェルだ。  
ただしげさん・・・可愛いの一言に尽きる風景。  
ゆたかさん・・・微笑ましい情景ですね 幼時を思い起こします

## 四点句

春の温泉（ゆ）や東海林太郎を口遊む 紀久男

恵洲さん・・・おじ（い）さんの入浴風景、わかります。  
龍平さん・・・東海林太郎 直立不動で歌う秋田人 懐かしい。口遊まれたとは！  
允章さん・・・ずいぶんと懐かしい温泉風景ですね。野崎詣りはー♪とつい口遊

盛雄さん・・・出湯での鼻歌は東海林太郎「野崎参り」小唄ご機嫌さんが滲み出ています。

筋トレを始めて早足春の風

忠彦

隆さん・・・長い冬を抜けて、待ち焦がれた運動への期待。「速足」でもいい。これまでに幾つの別れ春の虹

とみ子

恵洲さん・・・春の虹のはかなさと、これまでに幾度の別れを経験したことだろうという感懐が良くハモっています。

孝岳さん・・・はかなくも消える春の虹のように幾つもの別れを経験している。時の移り変わりに人生の儂さを感じる良い句です。「春の虹」が効いています。

紀久男・・・亡くなった保明さんの奥様の作品と知り実感が湧きました。当会に投句されて間もないのですが、高得点が続いております。お訊きしますと連句のベテランで時節柄 WEB 句会の由です。

花咲くも訪ない来るは小鳥のみ

ゆたか

孤舟さん・・・庭の桜が満開だがコロナ禍で誰も見に来てくれない。ただ小鳥が蜜を吸いに集まって来るだけ。

猫のゐる木瓜の花垣接骨院

びん

天牛さん・・・今どき生垣のある接骨院は街中にはないでしょうね。

あまご食ふ箸の先から春の立つ

啓子

とみ子さん・・・箸の先からという部分により 香りや美味しさが良く伝わりました。桜餅老舗菓子屋にのぼり立つ

天牛

隆さん・・・桜の季節の始まりを「のぼり立つ」で告げた。

### 三点句

我家の前の木蓮が一斉に開花、地味な花だが春の楽しみ

木蓮の花列をなす通学路

そらお

ただしげさん・・・通学路にある木蓮の花、その道を通ると爽やかな香りが漂っている感じが。

春めくや琴平歌舞伎の古き小屋

紀久男

孤舟さん・・・期待されていた春季興行は無事開催されるのであろうか。ただしげさん・・・凡そ百八十五年前に建てられた讃岐金毘羅の芝居小屋、金丸座。例年四月頃に歌舞伎の公演があり、琴平の春の風物詩。芝居小屋は回り舞台やセリは全て人力で、お茶子さんと呼ばれるボランティアが案内係を勤めている。

恵洲さん・・・20年ぐらい前、歌舞伎通の（紀久男さんでない）友人の案内で、金丸座に行き、芝居小屋の雰囲気堪能したことを思い出しました。

「盛綱陣屋」

梅匂ふ芸の深みや菊之助

紀久男

敏郎さん・・・最近の進境楽しみですね。

天牛さん・・・梅匂ふと芸の深みがマッチしている感じでいいですね。

紀久男（自解）・・・「盛綱陣屋」は音羽屋系統には無く岳父の吉右衛門（播磨屋）系統の演目です。岳父の書き込みのある台本を読み込み彼なりの工夫

を凝らして、初役ですが劇評も良く芸域を広げております。

孫コロナ遂に我が家に春嵐

忠彦

ただしげさん・・・祖父母の動揺する気持ちがよく理解できる。

敏郎さん・・・早く収まります様、祈るや切。

雀隠しまだ手付かずの未来あり

孤舟

とみ子さん・・・同じように手付かずの未来があるのですから年を重ねるのも良いものと教えられました。

不屈なるコサツクの裔春嵐

五郎太

ゆたかさん・・・ロシアに容易に屈しない闘魂に感動します。

天牛さん・・・ドン・コサツクを思い出しました。

みちのくの仕込みを終えて杜氏帰る

ただしげ

孤舟さん・・・出稼ぎに来ていた杜氏が、冬の作業を終えて故郷へ帰ってゆく。

漁に出る船一艘に冴返る

ただしげ

恵洲さん・・・大きな漁船でなく、釣り船の類か。寒の戻りの中を海に出て行く、

孤舟（選者の俳号ですね）の寒げな様子が思い浮かびます。

止められぬ狂人ひとり春の泥

千恵

とみ子さん・・・一步踏み込んだ表現により時事が心に響きます。

龍平さん・・・PutlerとXiとKim 3年後の今日今夜 何処でどうしているか？

独活の香やお江戸育ちの地下育ち

千恵

とみ子さん・・・テレビ番組で地下に育つ独活を見ました。いい俳句を作られると感心。

盛雄さん・・・中七から下五の表現がユニーク。独活は土中での暗闇栽培が増え通

人好みの春の珍味。刺身のツマ、酢の物・・・柚子味噌が良い。

朝摘みの露の芽届き灘二合

堂哉

ゆたかさん・・・露の臺は私も好物です 灘の生一本いいですね。

誰何されず国境越えて雁帰る

昇

健介さん・・・“世界は一つ”なんて所詮は幻想ですかねー

傘かしげ幼見上ぐる花の雨

規雄

敏郎さん・・・何とも可愛い仕草！お孫さんですか！

籠り居の赤き椿の散る夕べ

ただしげさん・・・静寂とした中になんとなく寂しさを感じた。

雲雀鳴く幸せな日を思ひけり

けい子

孤舟さん・・・戦渦に苦しむ民族が居るなか、私達はうらかな雲雀の啼く平穏な日々を送ることが出来て幸せである。

肩上げを十三詣で見納めぬ

亜也

天牛さん・・・肩上げなんてことを知っている人は少なくなりました。

花便り人も嬉し上野かな

亜也

五郎太さん・・・上野は公園口も整備され、花を賞でる人、美術・音楽、京都を模した名所、落語を愛する人などで山も街も賑わいが戻り、その中に混ざっている嬉しい。

いつしかに昭和は遠く目刺焼く

盛雄

孤舟さん・・・「明治は遠くなりけり」と言っていたのは何時だっただろう。光陰

矢の如し。

紀久男・・・昭和了つて33年。皆さん後期高齢者になりました。目刺を火鉢で焼いた頃を想い出す作品です。伊丹のきさらぎ句会でも高得点でした。

## 二点

### 華やげる初日の幕間桃の花

五郎太

紀久男・・・歌舞伎座初日のロビー（一階と二階）は吹抜けで、桃の花を飾り一段と華やぎを増し、和装が映え、その雰囲気を上手く句に詠まれています。

### 雪融けの山に向いて初ゴルフ

國護

ただしげさん・・・この季節雪解けの山を見ながらのゴルフ、すがすがしい感じがする。

紀久男・・・長野の名門（書店やスキー板等）で昭和45年慶應ボーイのリーダー格。繊維↓物資↓ミラノ。毎年初ゴルフを同期入社の大勢と催しておられるようです。

### バギーよりこぼるる園児花の中

びん

紀久男・・・近所の公園で同様のシーンを目撃したことがあります。中七の表現が好いと思います。

### 年一度五人囃子の並べ方

亜也

恵洲さん・・・五人囃子や三人上戸や雛の調度迄そろった立派な雛壇が目には浮かびます。お内裏様の右左さえ自信のない選者としては、五人囃子の並び順に毎年迷われるのは、さもありなんです。

とみ子さん・・・並べる順番を忘れるのもそれはそれで楽しいひとときですね。わらび餅きな粉の海でおぼれそう けい子

孤舟さん・・・鼻息で黄な粉が霧散して大変なことに。

紀久男・・・一寸大仰な表現が面白い句です。

## 一点句

### ウクライナ国歌美し春寒し

恵洲

昇さん・・・ウクライナに平和な春が早く来るのを祈るばかり。

### 煙立つ田んぼの中の野焼きかな

ただしげ

天牛さん・・・今でもこんな風景が見られるのですかね。

### 足るを知らぬ大統領や春の雷

びん

びんさん（自解）・・・人は自ら足るを知らざるに苦しむなり。既に隴を得てまた蜀を望む「これは約二千年前、後漢の世、三国志の魏の英雄曹操の言とされる。蜀は今の四川省。「既にクリミアを得てまた・・・」と言い替えると、三国志の大陸の興亡が蘇る。ウクライナの悲劇ははそんな歴史ロマンとはほど遠いようだが。

### 木の根元一人静かの慎ましく

規雄

紀久男・・・野草「一人静」のお心算でしょうが、原句「一人静か」の送り仮名は余分です。



## 青葉会予定

令和四年四月二十八日(木) 十三時～十六時半

於：三茶しやれなあと 会議室(ビーナス)(15分前に会議室に入室可) ※左地図ご参照

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。締め切り：四月二十六日(火)中。

参加の可否、ご投句のご連絡は：今井宛FAXか郵送、或いは星田メール

([keiko-reve@07.itscom.net](mailto:keiko-reve@07.itscom.net)) までお願い致します。

郵便は三日かかります(土日の配達はありません)

※三茶しやれなあと 世田谷区太子堂2-16-7 三軒茶屋分庁舎5階 ☎03-3411-6636

東急世田谷線(終点)下車徒歩3分 / 東急田園都市線三軒茶屋駅下車(出口：北口A)徒歩1分

※会場は左記した地図の赤く塗り潰り潰したビル5階。バス停が目印です。

ATM(みずほ銀行)が設置されているビルで一階に宝くじ売り場があります。

ATMはビルのエントランス右手に設置してあるためビル正面に立って初めて見ることが出来る位置ですそのATMの脇を通りビルに入り、エレベーターで5階にお越しください。



## 青葉会報

一、今回は有力新人の西澤國護さんや、久しぶりの大阪から堂哉さんを交え九名出席。投句は最長老でお元気な天牛さんはじめ三名。会場は一月を除いてこのところ連続の赤坂飯店。初めて個室で二卓使ったの開催でした。いつもの五郎太さんの進行で快調に進み、ご覧の様に、そらおさん、堂哉さん、とみ子さん、正明さんが好成績。終了してから入り口で集合写真を撮りました。社友会用に掲載予定です。

## 二、 関係者近詠

師と仰ぎ初むは年下福寿草	眞希子	剃りあとのすべすが好き今朝の春	陽亮
正月のトランプ雑魚寝いとこどち	全	先立てる友ら挙れる初の夢	全
新年の抱負を胎の子へ語る	全	初詣赤紙二度と許すまじ	全



門松の間を入れれば検温器 眞希子 餅背負ひ必死の三步稚の意地  
真つ先に届く教科書火事見舞い 全 握り拳ほどかぬ稚の初湯かな 全 陽亮  
ぎこちなき寒栴夜へ遠くなる 弘子 御慶交ふ歌舞伎座ロビー華やげり 紀久男  
獅子舞のたうたう獅子となりにつけり 全 小三治も播磨屋も居らぬ初御空 全  
猛禽の結ぶ嘴めく牡丹の芽 全 妻御機嫌倅一家と年酒酌む 全  
ことごとと蓋の旨鳴り齋粥 全

「森の座」四月号（横澤放川選）

母の忌へ忘ることなく春苺 盛雄 難民の子らはいづくへ鳥帰る 健介  
春暁の露地おどろかす救急車 全 一人旅夜列車の受験生 全  
春一番竹馬の友の逝きし日に 全 福島が目刺をあてて茶碗酒 紀久男  
春めきてスキップ愉しき下校の子 全 喜寿を機に愛車手放す妻臚 全  
朝練の高き掛け声春めける 健介 若夫婦に三輪車譲り海胆貰ふ 全  
巢籠りや今さら古典面白し 全 春めくや古今亭一門のチラシ来る 全  
「きさらぎ句会」三月

真つ白に薺咲く田へトラクター 允章  
遠蛙日暮れとならば酒恋し 全

香ばしきパン焼く香り春の風 秋元宏

——中日俳壇三月 栗田やすし選 句評付き（七行あり。その最後に・・  
「微妙な気配を自分で感じ取らないと詩は生まれない」

人災 天災 目白押し （丹野敦雄さん（龍平さんのご友人）、久しぶりのご登場です。）  
涅槃西風補聴器越しにヒトの愚拳 丹野敦雄  
霊長類と言いも言いたり四月馬鹿 全

### 三、 孤舟選者近詠

桜隠し猿と浸かりし野天風呂 頸を振り落花を払ふ盲導犬  
若鮎のひかりとなりて堰を越ゆ ふうここは風と遊んでゐるばかり  
歌舞伎跳ね桜かくしとなりにつけり

### 四、 新居斎（いつき）さんの訃報

一月八日間質性肺炎（肺気腫で）他界された旨、奥様からお葉書  
拝受。斎さんからのお年賀状には俳句に打ち込む意欲充分で電動車椅子を駆使されている由でしたが。  
昭和36年入社物資営業経理。結社「萩」村田主宰急死で廃刊となったときの師範代。香港駐在時に  
漢俳をマスター。国際俳人協会々員。オホーツクに吟行。スペイン語を習得し、アルゼンチンタンゴ  
を楽しまれた由。俳号「無聞斎（むもんいつき）」

### 五、 ウクライナへのロシア侵攻

青葉会の折、一番話題に。日経コラム「春秋」に載った、日本の  
各人が出来る支援を実行すべしとの言葉に煽られ、UNHCR、ユニセフ等に支援金を振り込んだ会員  
が多かったようです。

令和四年四月十五日

紀久男 記